

大南っ子

平成29年10月10日
北九州市立大里南小学校
校長 酒井 孝子

平成29年度 全国学力・学習状況調査の結果の報告と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、平成29年4月18日（火）に、6年生を対象として、「教科（国語、算数）に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

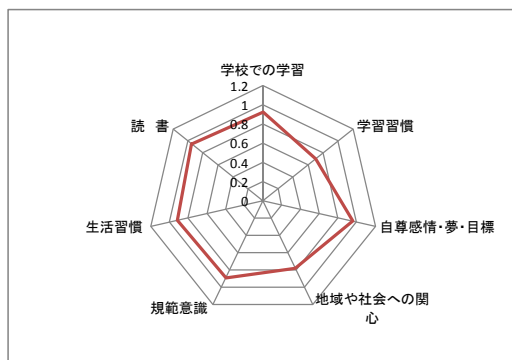
学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にさせていただきたいと思います。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

1. 教科に関する調査結果の概要

教科・区分	学力調査の分析（傾向や特徴）	全国平均正答率との比較
国語A	全国平均正答率をわずかに下回っていたものの、漢字を正しく読む問題など、正答率が全国平均を上回っている問題も多かった。全体的に書く力を問う問題の正答率が低く、書く習慣を日常的に身に付けさせる必要がある。ことわざの意味を理解し自分の表現に用いる問題の正答率は高かった。手紙の後付けに必要なものを適切に選ぶ問題の正答率が低かった。	下回っている
国語B	全国平均正答率を下回った。特に、記述式の問題の正答率が低く、書くことに対する苦手意識を払拭していく取組を行っていく必要がある。話の構成を工夫して話すことができるなどのスピーチメモのよさを捉える問題の正答率は高かった。目的や意図に応じ必要な内容を整理して書く問題の正答率が低かった。	下回っている
算数A	全国平均正答率をわずかに下回っていたものの、基礎的な計算問題や商を分数で表す問題などは、正答率が全国平均を上回っていた。任意単位による測定の理解等の問題の正答率が低く、理科など、他教科での算数的要素の学習も充実させる必要がある。加法と乗法の混合した整数と小数の計算問題の正答率は高かった。1より小さい小数をかける問題場面を理解し、数量の関係を数値直線に表す問題の正答率が低かった。	下回っている
算数B	全国平均正答率をわずかに下回っていたものの、量と測定領域と図形領域の問題は、正答率が全国平均を上回っていた。全体的に記述式の問題の正答率が低く、無解答率が高かった。通常の学習でも、書く問題にも粘り強く取り組むようにする必要がある。飛び離れた数値を除いた場合の平均を求める式を判断する問題の正答率は高かった。二つの数量の関係を一般化して捉え、そのまわりを記述する問題の正答率が低かった。	下回っている

2. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問紙調査結果の概要



質問紙調査の結果分析

普段1時間以上家庭学習をしている児童の割合は、全国平均よりかなり低く、自分で計画して勉強している児童の割合も低かった。学校の宿題のみの家庭学習をしている児童が多く、家庭学習の絶対量が少ない実態を把握することができた。宿題以外の家庭学習に積極的に取り組ませる必要がある。

地域や社会に関心を持ち、行事に参加している児童が少ないが、少しずつ増えてきている。

将来の夢や希望を持っている児童は確実に増えており、全国とほぼ同レベルになってきた。

3. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科に関する取組（全校で・学年で・学級で）

1時間の授業の中に、【個人思考：自分の考えを持つ⇒考えを表現し伝える⇒集団思考：話し合いで考えを深める】活動を多く設定する取組を全教員で実践する。また、算数科の力を高めるために、「子どもの考える力が育ち、学力が確実に身に付く算数科学習指導法の研究」の研究実践に全職員で取り組む。特に、話し合い活動や学習後の振り返りについて指導を充実させ、考える力や書く力を育てる。

ひまわり学習塾の裁量型を活用し、毎週2回（月・木）放課後20分間、学級担任主導の下、基礎問題を中心に補充学習を行う。5年生においては、計算領域を中心にスクリーニングテストを実施、その結果をもとに基礎基本の定着を図る補充学習を行う。低学年では、MIMIに取り組み、正確に素早く読み取る力のトレーニングを行う。

② 家庭生活習慣等に関する取組

学力向上推進委員会による児童の学習習慣<学習用具の共通理解・学習の取り組み方(学習態度・ノート指導・発表の仕方等)>の定着を図る。

自主的に工夫して取り組んだ児童の自主学習の例を紹介し、「家庭学習マイスター」への応募への推進を図る。3年生以上は、宿題の他に音読・読書・家庭学習チャレンジハンドブック等自分で計画して1日60分以上勉強することを、家庭と連携して推進する。